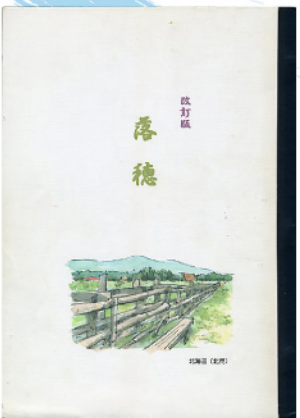


ふるさと交友録

～ 伊藤 公平 ～ 8

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。この「交友録」では、月一回のペースで公平さんの「大切なひとびと」を紹介していただきます。



改訂版「落穂」

何かの時に私は祖母が亡くなった時のことをオサムに話した。祖母の看病を叔母と交替した私は隣りの部屋で仮眠していた。と、肩をゆすられて目を覚ました。が、そばには誰もいなかった。目を覚ましてしまったので起きることにした。

祖母はまもなく亡くなった。祖母が、もうすぐお別れだからと声をかけに来てくれた。それが肩をゆすられたという超常現象になったのではなからうか。

そんなことを話したら、オサムも「そう言えば僕にも似たような思い出がある」と言った。オサムのおじいさんは「三之助さんと言って北見がまだ野付牛といつた開拓のはじめの頃、お兄さんの宇太郎さんと一緒に駅前の一等地に⑨新井兄弟商會を開き、独特な商法で繁盛した。

上仁頃には大地籍の農場を開き、ドロノキを原料とするマッチ軸の製造工場も開いた。三之助さんは「落穂」と題する回顧録を残している。新井家の年代記である。のちになって、オサムが校閲して

この改訂版を再出版している。この一書は新市街地形成前後の北見を知る貴重な資料の一つである。

そのおじいさんが入院していて、いまわの時を迎えて両親は病院に詰めていた。子供たちはすぐ近くの自宅で留守番をしていた。

と、パッと電灯が消え、一瞬間をおいて点灯した。どうしたんだろうと話しているところに電話がなって、母が「今、おじいちゃんが亡くなったヨ」と言った。

オサムは「そうだな、じいさん、ぼく達にさよならを言いに来たのかもしれないナ」と言った。

オサムも私もどちらかと言えば、あの世とかゆうれいとかなんて話はあまり信じない方だが、「きつねの嫁入り」を見たことのある私としては、こんな話を丸々鵜呑みにしないまでも、どこかに私たちの知らない世界があつて、何かの拍子にヒョコッとその世界を垣間見ることもあるのかなと思う。